

アルペール＝カミュの卒業論文

「キリスト教形而上学とネオプラトニズム」について

惟村 宣明

1. はじめに

「以下のページで扱われるのは、今世紀のあちこちに見出される不条理な感性である。不条理な哲学ではない、はっきり言って僕らの時代はまだそれを知らないのだ。」(注1)

カミュの『シーシュポスの神話』はこのような言葉で始まる。カミュが亡くなってから41年(注2)という月日が流れ世紀も改まったわけだが、不条理の哲学が確立されたという話はいっこうに聞かない。しかし不条理な感性のほうについていえば、そのような味わいは、いっそう複雑にあらゆる局面から展開されているように思われる。「現代は予謀と完全犯罪の時代である。現代の犯罪者は愛のゆるしを求める無力な子供ではもはやない。」(注3)とカミュは言う。そのような犯罪は彼の時代の次元を超えてあらゆる場面に現れる。不条理は進化し発展しているのである。

ところで、今日一定の共通理解が得られるようになったこの言葉の発端は、いったいどのようなものであったのだろうか。カミュの思想を逆向きにたどって見るならば、1951年の『反抗的人間』では、「これは私の時代を理解するための試みである。」(注4)として、いわば「われわれの不条理」を語っているわけだが、1942年の『シーシュポスの神話』では、「自殺は否か」といった命題から、「我の不条理」を取り扱うわけである。さらにその起源をたどるなら、われわれはカミュの創作手帳の不条理に関する1936年の最初の作品構想から(注5)1940年の「異邦人、全ては僕にとって異邦人であることを告白すること。」(注6)という記述に至る期間の彼の心境に着目せざるを得ない。そこでわれわれは、不条理の作品を形成する諸テーマが、彼の極めて私的な領域から取られていることに気付くのである。ママン、太陽、アルジェ、死といったテーマは、先行する彼の二つの初期エッセー集『裏と表』(1937年)『結婚』(1938年)やそれ以前の創作断片にすでに現れ、さらにそれらが彼の伝記的事実から取られていることはすでに良く知られている。ここから言えることは、主たるテーマに私的な痕跡を色濃く残すような場合、その著者の本質は普遍的命題を扱う哲学者ではなく、社会に問いかける革命家でもなく、作家そのものであるということだ。カミュの悲劇は、作家が哲学者、革命家として語られたことに起因する。ところで作家というものは、哲学的であれ、社会的であれ、個人的であれ、あらゆる次元の問題を自己の創造エネルギーに還元する。先に述べた初期作品群をたどることで、われわれはカミュが個人的体験を芸術的な感性のエネルギー源にするさまを見ることができよう。一方、彼のような哲学的テーマを掲げる作家の場合、思想がどのような形で創作の源泉に昇華されているのか。その痕跡をたどることが必要になってくるのである。若い頃のカミュがニーチェに傾倒し、キルケゴール、シェストフ、ハイデッカーといった哲学者に親しんだことは、伝記などによって知られている。しかし彼の思想がこれらの哲学者とどれく

らの距離があるのか、その影響関係について解答を出すのはかなり難しい。すでに公刊されている彼の手帳類などの資料に、自らの思想形成を推測させるような箇所は少ないし、また彼自身生涯、既成の「～主義」といわれるものに属したり接近したことはほとんどない。むしろ彼がすごしたアルジェ貧民地区の雰囲気を与えた影響が大きく、彼の哲学は常に独特のものであったという印象が強いのである。

このような作家の思想形成をたどろうとする時、われわれは、公刊されている彼の哲学的論文に扱われている哲学者達との関係を吟味するという方法を用いるしかない。今日われわれの知るカミュの論文の中で最も若い時期にかかれたものは、19～20才の頃書かれたもので、「直観」と題されて『カイエ篇』に収められている。ニーチェやショーペンハウアーらに言及したそれらの作品はしかし習作という位置付け以外の何ものでもない。まとまった形の論文として最も古いものは、1936年5月25日に認定証を得た彼の大学卒業論文、『キリスト教形而上学とネオプラトニズム』である。しかしこの論題は後の不条理の作家が選ぶものにしては意外な観がある。なぜ彼は宗教的なテーマを選んだのか。この卒業論文はどの程度彼の初期思想を反映しているのか。カミュと、ここで扱われている初期キリスト教の思想家やグノーシス派、聖アウグスチヌス、プロティノスといった思想家との関係、宗教と彼の立場はいかなるものだったのか。彼の不条理の思想を理解する上で興味深い問題がここに見出されるように思われる。この論文ではそのうち、彼のオリジナリティがどのような形で反映されているかを吟味し、ここで扱われている諸思想家と彼との関係を研究するうえでの基礎固めとしたい。

2. カミュの卒業論文について

この卒業論文はどの程度彼本来の意志を反映しているのだろうか。すなわちどれくらい身を入れて書いていたのか、われわれは素朴な疑問を感じざるを得ない。なぜならこの時期のカミュは、23才の若者としては、多方面にわたり極めて多忙だったからだ。先ず彼には健康面の不安があった。1930年17才の時発病した結核は生涯彼を苦しめたが、1935年と1936年の夏にはかなり重症になっている。また、大学在学中の1934年に、友人の恋人を奪う形で結婚した妻との関係は必ずしも良好なものではなかったようだ。このような肉体的精神的状態の中で、カミュは1935年に共産党に入党し、党の息のかかった劇団〈労働座〉において、俳優兼脚本家として大衆啓発のための演劇活動を開始する。この劇団は1936年1月には、マルロー作・カミュ脚色による『侮蔑の時代』を上演して成功している。また同じ年の5月に、彼は共同執筆の形で『アストゥリアスの反乱』を上梓している。つまり卒業論文を準備するために、ポワリエ教授のもとでラテン語文献講読の指導を受けていたのと同時期に、彼は演劇活動に打ち込むのである。たとえそれが素人芝居に過ぎぬものであっても、一つの作品を立ち上げ、上演にまでこぎつけるには、大変な時間と労力を必要とするものである。果たして膨大な量の読書と芝居は両立できたのであろうか。これがわれわれの訝しがる所以である。

ところでカミュの論文は、このような状況のもと、「手抜き」の部分が見える程度のレベルのものなのだろうか。なるほど彼の指導教授であったルネ＝ポワリエは、「哲学者というよりも作家の作品。」として、彼の哲学学徒としての資質に疑問を呈している。またこのテーマに

詳しい研究者たちによれば、その内容は非凡なものとは言えず、その上他の研究者の成果を利用しているとする評価もある。われわれに今、それらの評価をうんぬんすることはできないが、しかしながら一読して驚くのはその内容のわかりやすさである。要するにこの論文は、「キリスト教の独創性を理解するために」「その深い意味をなすものを明白にし、歴史的観点よりその起源にさかのぼる」(注7) 事を目標にし、ギリシア哲学との比較によるのではなく、一つの信仰としてそれを支える感情的次元の内にその斬新さを求めるという一定の方針が貫かれている。カミュによれば、ギリシアの哲学と一信仰であるキリスト教はもともと両立し得ないものを含んでいた。しかし紀元前2世紀の不安と諸文化融合の時代に、精神的な満足を得ようとする人々の願望はキリスト教への道を準備しつづける。人間と神とを隔てる距離はあまりにも大きく、絶望のみが広がる中、キリスト教においては、「受肉」によって神が人間のところまで降りてくるのである。ここから普遍的希望が生まれる。したがって信仰のみが問題となってくる。カミュは、キリスト教の究極的独創性はまさにこの「受肉」にあるとし、同じ「不安」という土壌から出発したギリシアの解答であるネオプラトニズムを吟味し、そのネオプラトニズムの枠組によって聖アウグスチヌスが「受肉」の形而上学としてキリスト教教義を成立させるさまをたどる。そして「キリスト教はギリシア思想からその素材を借り、ネオプラトニズムから方法を借りた。そしてあらゆる困難さを「受肉」と言う次元で扱うことによってその深い心理を無償のまま保持した。」(注8)と結論する。

確かに、この論旨の展開自体は教科書的であり、独創的なものとは言いがたい。福音的キリスト教・グノーシス・ネオプラトニズム・聖アウグスチヌスと続く考察の中で、カミュはざっと数えただけでも30人ほどの教会学者・思想家の著作に言及しているが、その読みは比較的手堅いもののように思われる。このわかりやすさ、手堅さは、卒業論文ということのゆえであろうか。カミュの哲学的論文の中では異例のことである。例えば『シーシュポスの神話』で「空虚が雄弁になり、毎日の行動の鎖が断ち切れ、心がむなしくその鎖を結びなおす環を探している魂の状態…」(注9)といわれても、全ての人が同じものを心に描くとは思えない。『反抗的人間』はさらに難解なものである。またカミュの取り上げる哲学者に対する読みにも独断や曲解があることはサルトルも指摘している。カミュが不条理を語る時、実に様々な比喻をあげ、かえってそのことが論の展開をわかりにくくしていることを考えて見ると、この卒業論文のわかりやすさ・手堅さは、次のようなことを表わしているように思える。つまりこの論文はポワリエ教授の指導に負うところが大きく、カミュ自身、この分野を生涯の研究テーマにするという自負と野心は持っていなかったのではないかという事だ。ただ、主題が教授によって与えられたものであれ自ら選んだものであれ、勉強はまじめで手抜きをしたところが無く、読書は膨大であった。後年彼が気象観測所のアルバイトで見せた几帳面さを彷彿とさせるのである。

少なくともわれわれは次のようなことを言うことができよう。カミュは、左翼的な演劇活動に熱中しながら、ポワリエ教授の課題をきちっとこなし、キリスト教教義発展の歴史について一定の理解をしたということだ。二つの傾向の違う活動は両立し得た。われわれはそこに強靱な精神力と深い問題意識という大きなエネルギー源を感じ取るのである。つまり初期のカミュ

の精神を見出すのである。そこで問題になるのはカミュとキリスト教の微妙な関係である。彼がどこまで積極的にこの卒論のテーマを選んだのかはくわしく伝わっていない。ロジェ＝キヨは彼の恩師ジャン＝グルニエの影響を指摘しているが、いずれにせよ彼の問題意識とキリスト教史の理解が矛盾するものではなかったということは、その手堅い読書から推測できる。それどころか彼にはこの問題に立ち向かう一定の熱意があったとみなすことさえできる。当時共産党に入党しており、将来不条理の思想家となるべき人間が抱いたキリスト教への関心とはいかなるものだったのか。アデル＝キングがこの時期のカミュについて、「カミュはくわれわれの王国はこの地上の世界にある」という点ではギリシア人と見解を同じくし、この世界は常に死が差し迫っている悲劇的な場所であるという意味では、キリスト教徒に同意しているようだ。」(注10)と評したような明確な態度をこの論文に読むことが出来るだろう。

確かにカミュは、キリスト教が求められた土壌は死と至福の不可能性から来る不安であった、という認識から出発する。またパスカルの「ここに幾人かの人が鎖でつながれているのを想像しよう。皆死刑を宣告されている。その中の何人かが毎日他の人達の目の前で殺されて行く。残った者は、自分たちの運命もその仲間達と同じであることを悟り、悲しみ絶望とのうちに互いに顔を見合わせながら、自分の番が来るのを待っている。これが人間の状態を描いた図なのである。」(注11)という言葉を引き合いに出し、「これらの死刑囚から、彼らを熱狂させるべき希望が生じたのである。」(注12)として、信仰に理解を示している。しかしながら卒業論文という性質ゆえ、カミュ自身のキリスト教に対する個人的考え方をこの論文から引き出すのは難しい。強いて言えばこの論文は、カミュの信仰に対する醒めた目を示唆しているように思われる。なぜなら、キリスト教の優れた点は、至福との合一を受肉という「考え方」で可能ならしめたことであり、それゆえ人々に受け入れられたと、きわめて客観的な調子で扱われているからである。さらにキリスト教はギリシア思想を取り入れることによって決定的な普遍性を得たとして、キリスト教本来のものに対する評価は低い。それにしても不思議なのは、この宗教のもう一つの主要な特質である隣人愛についてほとんど触れられていない点である。このような偏った態度からわれわれは次のように推測することは出来ないだろうか。つまり彼がこのような主題を選んだのは、キリスト教そのものへの関心からではないということだ。彼はむしろ、死とその不安を克服する仕方こそ関心があったのであり、プロティノスがギリシア哲学の力だけでいかに解答するか、聖アウグスチヌスがネオプラトニズムの影響を受けて、信仰の立場からいかに解答するか、それを知ることこそ彼の最大の努力目的だったのではないだろうか。してみるとカミュがマルローに関心を持ち、革命戦争を描いた『アストゥリアスの反乱』を執筆したことも、卒論にこのような主題を選んだことも、同じ情熱の一連の活動であったと合点が行くのである。

このように考えて見ると、カミュが5年後に『異邦人』および『シーシュポスの神話』を書いたときも、この論文を書いていたときもその精神的傾向にたいした違いは無いということが言えよう。しかしこのようにエネルギーに生きていた人間だけに、5年間の経験が彼の思想に微妙な変化を与えてはいないだろうか。ロジェ＝キヨが、この論文を書くことによってカミュは「ギリシア的もしくはキリスト教的思想よりも彼自身について多くのことを学んだ。」

(注13)と言っているが、この経験は不条理の世界観形成にどのような影響を与えたのだろうか。井上正氏は、この論文の問題意識について「この神秘的問いは彼の作品の随所に顔を出すのであって、この世で全ての決着をつける意志と一体になって、彼の芸術に神無き聖性とでも言うべき高潔さをかもし出している。」(注14)と言う、その問いの質は常に変わらぬものだったのだろうか。「不条理」の生成はいかなるものだったのだろうか。この卒業論文に手がかりはあるのだろうか。それを見て行くことにしよう。

3. 卒業論文に見られるカミュ思想の萌芽

まずカミュがこの種の哲学的論文を書く時、一定の切り口で始めることを指摘しておきたい。卒業論文と『シーシュポスの神話』『反抗的人間』のそれぞれの出だしを比べて見よう。

「カタコンベの絵画におけるキリストは、進んでヘルメスの顔をとる。たとえその微笑みは同じでも、そのシンボルは影響力を変えた。」(注15) - 卒業論文

「本当に切実な哲学上の問題は一つしかない。自殺ということだ。人生が生きられる値するか否かを判断することは、哲学上の基本的な疑問に答えるということだ。」(注16) - 『シーシュポスの神話』

「犯罪には衝動的犯罪と確信犯的犯罪とがある。刑法はそれらを予謀の有無によってたやすく区別する。現代は予謀と完全犯罪の時代である。」(注17) - 『反抗的人間』

これらを言語・文体の面から分析することは非常に興味深いテーマであるが、本論文では最低限の観察を略記するにとどめる。一目で普通の哲学論文とは異質なものが感じられよう。問題提起は象徴的な言葉で始まる。哲学用語はいっさい使われない。このようなスタイルを、卒業論文を書くことによって獲得したかどうかは定かでない。しかし後に「なぜ私は哲学者でなくて芸術家なのか。それは私が観念によってではなく言葉によってものを考えるからだ。」(注18)と記したその方針をすでにこの時期持っていたということはいえる。また卒業論文中に興味深い記述が見られる。「(プロティノス)は芸術家として思考し哲学者として感ずる。」(注19)という言葉だ。カミュのスタイルにはプロティノスへの共感があるということだ。なぜこのようなスタイルを取ったかという要因については今後詳しく研究されるべきであろう。

つぎにわれわれは、卒業論文の押さえた客観的な言いまわしの合間に、後のカミュを暗示させるものが無数にあることを指摘したい。それは先ずギリシア的世界観に対する共感である。

「丘の線、あるいは浜辺を走る青年の姿が、彼ら(ギリシア人)にとって世界の全秘密を明らかにしていた。ギリシア人の福音書は、我らの「王国」はこの地上にあると語っていた。」(注20)

この「浜辺を走る青年の姿」はカミュもよほどこだわりがあるのだろうか、『異邦人』(1929年)とその試作品である『幸福な死』(1937~1940)のいずれにも、港でエマニュエルという登場人物とトラックを追いかける競争の話として収録されている。

「僕は騒音とほこりの中におぼれた。もうなにもみえず、競争の並外れた高ぶりしか感じなかった。」(注21)

このように『異邦人』において、このエピソードは若さと生きる喜びを謳歌する印象的な一節として描かれている。このような調子はムルソーと恋人マリーの海水浴の場面にも現れている。また『異邦人』以前のエッセイ集『結婚』（1939）においては、さらに鮮烈な文体を見ることが出来る。

「誇るべきものはある、この太陽、この海、僕の若さに弾む心、塩辛い僕の体、そしてやさしさと栄光が黄色と青の中で出会うとてつもない景観。」（注22）

ところで地上の王国を賛美したカミュの文体の背後に、すでにこの頃からもう一つの調子が背中合わせに現れていることに、われわれは気付くのである。

「この世界にはたった一つの愛しか存在しない。女の体を抱きしめること、空から海へ下ってくる奇妙な喜びを自身に引き止めることだ。まもなく僕がアプサント酒に身を投じ、体にその香りをしみ込ませる時、僕は全ての偏見にたてつき太陽の真実を成就したという意識を持つだろう。それはまた僕の死の真実となるだろう。」（注23）『結婚』において生の真実が全編を満たしているのとは逆に、『異邦人』では死の真実が背景となるのである。そしてカミュにとってギリシア世界を象徴する「浜辺の競争」は、物語全体から見てたいした部分を占めないながらも奇妙な輝きを放っている。卒業論文から始まって、『結婚』を経て二つの小説へという流れをたどり、われわれは「ギリシア」に関するカミュの位置付けを次のように推測するのである。要するにカミュは、地中海人としてギリシア世界に共感を感じつつも、「地上の王国」における至福を古代にのみ通用するものとして、物語の背景に置いたのではないだろうか。つまり「ギリシア」は地中海人のエデンであり、二度とそこへ戻ることは出来ないのだ。地中海人は至福へ至る別な道を探さねばならない。カミュがプロティノスに向かったのは「ギリシア」に至るためではなく、それを乗り越えるためだったのではないだろうか。

プロティノスを考察した卒業論文第三章には、カミュ作品のいくつかの傾向を理解できる言葉が見られる。

「理想的叡智（第二の格位）とは対象が主体と合一し、純粹思考が自己自身についての思考に過ぎないような一状態のことである。」（注24）

「どうしてこの部分（第三の格位＝霊）と全体を調整したら良いのか。」（注25）

「霊は神への欲求であり失われた祖国への郷愁である。」（注26）

こうした言葉はカミュのオリジナルな思考をある程度表わすものであって、例えば失われた樂園、祖国への帰還といった言葉は、卒業論文以前のごく若い頃の断片にすでに現れ、1937年に刊行されたエッセイ集『裏と表』に収められている『ウイとノンの間』と題された作品に集約されている。それはカミュにとってはきわめて個人的な空間と時間を指す。すなわち自分の貧しかった少年時代と、聾啞者であった母親のことを指しているのだ。一方で、一致 (coincider) ・合一 (s'identifier) ・調整 (concilier) ・統一 (unite) など、単語は色々だが一定の運動を表わす言葉は、特に『結婚』において顕著に用いられている。アルジェリアの自然を自分の生と同調させ、自分の内部を語るかのごとく描くのである。カミュに特有なことは、「一者」あるいは「神」を求めべき運動の中で、彼自身の現実、つまり死とも合一しなければ

ばならないことを自覚するのである。「生を高揚させる者は同時にその不条理も増大させる。」(注27)『幸福な死』でメルソーは、自らの死を見つめつつ世界の真実に還っていくが、『異邦人』のメルソーはママンのことを思いだし、世界のやさしい無関心に心を開く。つまり失われた祖国に一步近づくわけである。

死の現実を認識するということがどのようなことを意味するのか、卒業論文を書く時点でカミュはすでに経験し、知っていた。

「われわれの経験の世界では、この死の観念を実感することは、われわれの人生に新たな意味を与えるということに帰着する。」(注28)

これは終末思想がキリスト教形而上学の形成に主要な役割を果たしたという文脈で語られている。ところでカミュは病気という個人的体験から死と向かい合わねばならなかった。カミュの不条理の根本はまさにここにあるのではないだろうか。終末思想や疫病、戦争などの渦中にあるのなら、集団的死の意味について考えることになろう。カミュは「たった一人で死んで行くこと」を多くの作品で問うている。不条理が個人的体験だからこそ、あれほどまでに生きることへの熱情的問いかけが行われたのではないだろうか。さらに不条理に対する反抗のあらわれもこの論文に見えている。

グノーシス派のマルキオンが性欲を断てと命じたのは、悪をなす旧約の神が「生めよ増えよ」と言ったからなのである。と解説した後、こうしたペシミスティックな世界観と拒否には「全く近代的な感受性が反映している。」(注29)と語るその感受性こそが不条理の感性の最初のあらわれなのではないだろうか。

4. 結論

カミュの卒業論文は、控えめで手堅い論旨を展開しているものの強烈な問題意識が一本貫かれている。したがってそこには将来の彼の作品や思想に発展すべき多くの要素がすでに現れている。この卒業論文においてわれわれは、5年後『シーシュポスの神話』に達する前の段階を読取ることが出来る。それは結核という病気によって立ち向かうことになった死の現実意識から出発し、プロティノスに影響を受けた感性的世界認識であった。不条理の思想にはいくつかの発展段階があるように思える。この初期の段階は少なくとも1937年、『裏と表』を刊行し『結婚』『幸福な死』に着手する頃までのことではないだろうか。この頃のカミュは世界と合一して生きる喜びを謳歌する文体と、人間の悲惨を直視する文体に統一が取れていなかった。不条理の思想を構成するには死の認識体験だけでは不十分で、これに加え絶対的孤独の体験をする必要があった。1936年卒業論文を出すまでのカミュは夫婦仲の問題はあったとはいえ決して孤独ではなかった。その年の夏、妻と決定的な破局をするプラハ旅行が新しい段階の引き金になったと思われる。第二の段階は1940年のカルネに記された「異邦人～」の叫びから始まると思われる。いずれにせよこの卒業論文は彼の初期思想を研究する上で重要な手がかりとなる。ここに上げられた思想家とカミュの関係を徹底して研究する必要がある。

[注]

* *Essais* は、プレイヤード叢書 *Albert Camus Essais* Gallimard の略。

注 1. *Essais* p.97

注 2. カミュが亡くなったのは 1960 年 1 月 4 日である。

注 3. *Essais* p.413 1.4-5

注 4. “ceci est un effort pour comprendre mon temps” *Essais* p.413 1.24

注 5. *Carnets I* p.24

注 6. “Etranger, avouer que tout m’est étranger” *Carnets I* p.202

注 7. *Essais* p.1224 1.8

注 8. *Essais* p.1308 1.7

注 9. *Le Mythe de Sisyohe* *Essais* p.106 1.35-37

注 10. 【カミュ論】 アデル＝キング、大久保敏彦訳 清水弘文堂
昭和 48 年 p.9-10

注 11. 【パンセ】 ブランシュヴィック版 199 番

注 12. *Essais* p.1235 1.17-18

注 13. *Essais* p.1222 1.22-23

注 14. 【アルベール＝カミュ】 人と思想 167 清水書院 p.36

伝記を書いたオリビエ＝トッドも同様の見解を述べている。

注 15. *Essais* p.1224

注 16. *Essais* p.99

注 17. *Essais* p.413

注 18. *Carnets II* p.146 1945 年頃の覚書。

注 19. *Essais* p.1286 1.14

注 20. *Essais* p.1225 1.27-29

注 21. *L'étranger* プレイヤード叢書 p.1143 1.23-25

注 22. *Noces á Tipasa* *Essais* p.58 1.13-17

注 23. *Noces á Tipasa* *Essais* p.58 1.1-7

注 24. *Essais* p.1278 1.8-10

注 25. *Essais* p.1279 1.29-30

注 26. *Essais* p.1282 1.23-24

注 27. *L'ete á Alger* *Essais* p.75 1.33-34

注 28. *Essais* p.1232 1.14-16

注 29. *Essais* p.1257 1.21-23

* 参考文献

—カミュの作品

- *Albert Camus Essais* bibliothèque de la pléiade Gallimard 1965

- *Albert Camus Théâtre Récits Nouvelles*

bibliothèque de la pléiade Gallimard 1962

- *Carnets I* Gallimard 1962

—カミュの伝記・評伝

- Todd, Olivier (1996) « Camus » Gallimard

- Lottman, H-R (1978) « Albert Camus »

- 井上正『アルベール＝カミュ』人と思想 167 清水書院 (2000)

- 白井浩司『アルベール・カミュその光と影』講談社 (1977)

- 西永良成『評伝アルベール・カミュ』白水社 (1976)